様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520045
研究課題名（和文）
初期新ニヤーヤ学派における遍充概念の形成
研究課題名（英文）
The Development of the Concept of Invariable Concomitance (vyapti) in Early Navya-nyaya
研究代表者：
和田　壽弘（WADA TOSHIHIRO）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：00201260

研究成果の概要（和文）：新ニヤーヤ学派の萌芽的分析方法を示す 10 世紀のウダヤナと、この学派の体系を確立したとされるガンゲーシャ（14 世紀）との中間に位置するシャシャダラ（1275-1375 頃）を取り上げ、彼の著した『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』「遍充章」を英語に翻訳し、その分析を通して、彼の遍充に関する議論が、ウダヤナからガンゲーシャへの過渡期的なものである事を解明した。

研究成果の概要(英文):This project has provided an English translation of the “Invariable Concomitance Chapter” (Vyapti-vada) of the Nyaya-siddhanta-dipa of Sasadhara (1275-1375), and its analysis. The analysis indicates that Sasadhara’s Sanskrit text carries the characteristics of the Navya-nyaya literature, and that the text includes the transitional discussion of invariable concomitance from Udayana (ca. 11th cent.), who is the founder of the Navya-nyaya school, to Gangesa (ca. 14th cent.), who is its consolidator.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：インド哲学
科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学
キーワード：インド論理学、新ニヤーヤ学、シャシャダラ、『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』、ガンゲーシャ、遍充

１．研究開始当初の背景

(1)　ガンゲーシャ（14 世紀）は『タットヴァ・チンターマニ』(Tattva-cintamani：TC) の中で、推論（anumana）の重要な論理的基礎となる遍充（vyapti、論理的随伴関係）の様々な定義を吟味し、一つの確定定義にいたった。(確定定義として、個物間にのみ成立する「特殊遍充」[visesa-vyapti] と見なされる定義が７つ挙げられるが、本研究では言及しない。) この定義は 1500 年頃のラグナータによる改良を受けたが、この学派の初学者に対して「確定定義」として妥当性を有した。また、ガンゲーシャ以降、全てのインド哲学諸派にもこの学派が用いた術語および記述の方法が浸透していったが、その際にはガンゲーシャの遍充の確定定義が、新ニヤーヤ学派の「確定定義」として紹介されることが多い。この確定定義は、先行するシャシャダラ（1275-1375 頃）の主著『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』(Nyaya-siddhanta-dipa：NSD) に提示された遍充の定義の内の一つを改良したものであることは、拙稿“A

Source of Gangesa's Conclusive Definition of vyapti"『印度学仏教学研究』42(2), 1994 が明らかにした。

(2)　新ニヤーヤ学派は14世紀にガンゲーシャによって体系が確立されて以来、その術語及び記述のスタイルはインド哲学のすべての学派に浸透していった。哲学以外の分野、例えば修辞学やダルマ文献においても注釈書を読む場合には、新ニヤーヤ学派の術語の知識なくしては理解ができない。中世インドの思想を研究するためには新ニヤーヤ学派の研究は避けて通れない。研究代表者はこれまで新ニヤーヤ学派の推論理論の研究を続けてきたが、この学派の術語と記述方法に関する研究の蓄積もある。このような研究の蓄積に基づいて、インド論理学の推論における重要な機能を果たす「遍充」という概念に焦点を合わせて、この学派の初期の研究を遂行しようとする研究者は他にいない。

(3)　関連する先行研究は以下の如くである。シャシャダラがガンゲーシャに影響を与えたという一般的な指摘は、D. Bhattacharya, History of Navya-Nyaya in Mithila, 1958 や U. Misra, *History of Indian Philosophy*, 1966 によってなされた。B. Matilal, *Sasadhara's Nyayasiddhantadipa with Tippana by Gunaratnasuri*, 1976 は、シャシャダラの NSD の校訂テキストを提示したが、翻訳および分析までにはいたらなかった。この校訂本に基づいて一連の研究が続く。 J. Vattanky, "Sasadhara's Isvaravada: an important source of Gangesa's Isvaravada", *Journal of Indian Philosophy* 7, 1979 は神の存在証明に関してシャシャダラとガンゲーシャの関係を論じた。このテーマは「推論」と深く関わるが、むしろ「推論」の一事例にすぎないのであって、両者の関係を明らかにしたとは言い難い。V. Jha, The Logic of Intermediate Causal Link, 1986 は、新得力（apurva）に関して両者の関係を論じた。S. Das, "Sasadhara's Arguments in favor of yogarudhi", *Journal of the Oriental Institute* 37, 1987-1988 はシャシャダラの意味論の一部を解明した。K Hota, "Sasadhara on arthapatti", *Journal of the Oriental Institute* 39, 1990 はミーマーンサー学派の含意（arthapatti）概念に対するシャシャダラの批判を解明した。

　我が国では、シャシャダラに関して丸井浩氏の一連の研究が注目に値する。「命令文の意味を問う議論」『インド学仏教学論集』、1987；「命令機能の論理的解明」『東方学』76, 1988；「ニヤーヤ学派における儀軌論争師の一断面」『印度学仏教学研究』37(2), 1989 は命令文の意味に注目してシャシャダラの意味論の一側面を解明した。

　本研究代表者の先行研究には以下のものがある。"A Source of Gangesa's Conclusive Definition of vyapti"『印度学仏教学研究』42(2), 1994；「初期新ニヤーヤ学派のシャシャダラによる vyapti の第二確定定義」『印度学仏教学研究』43(1), 1994；"Gangesa and Sasadhara's Second Conclusive Definition of vyapti", *Wisdom in Indian Tradition*, 1999；「初期新ニヤーヤ学派のシャシャダラによる遍充の第三確定定義」『印度学仏教学研究』51(1), 2002;"Sasadhara's Third Conclusive Definition of Invariable Concomitance (vyapti)"『インド哲学仏教思想論集』, 2004。

２．研究の目的

(1)　新ニヤーヤ学派の体系を確立したとされるガンゲーシャ(14世紀)の主著 TC は先行するテキストとの関係が明らかでないために、長い間、新ニヤーヤ学派は「突如として」歴史に登場したと思われてきた。さらにこの学派の術語と記述方法が以前に比べて斬新であるために、研究者たちにそのような印象を与えてきた。本研究は、ガンゲーシャと彼に先行するシャシャダラとのかかわりを考察することにより、具体的文脈において、ガンゲーシャが先行する思想家の影響を受けていることを解明しようとするものである。

　本研究代表者は、新ニヤーヤ学派の特徴が 11 世紀のウダヤナから次第に明瞭になると考え、彼をこの学派の創始者とする立場を取る。そしてウダヤナからガンゲーシャにいたるまでを「初期新ニヤーヤ学派の時代」と名付ける。シャシャダラはこの時代に属しており、従って本研究は初期新ニヤーヤ学のガンゲーシャに対する影響を明らかにする作業の一環である。

(2)　ガンゲーシャが遍充を中心的に議論するのは、TC「推論部」（Anumana-khanda）「遍充章」（Vyapti-vada）であり、その中で確定定義にいたる前に 21 の暫定定義を提示し、逐次その妥当性を否定する。シャシャダラも NSD「遍充章」（Vyapti-vada）において同様に多数の暫定定義を列挙して順次吟味している。これらの定義とガンゲーシャの暫定定義との対応は、B.K. Matilal, "Book Review of C. Goekoop, *The Logic of Invariable Concomitance in the Tattvacintamani*", *Journal of American Oriental Society* 92(1), 1977 および拙著 *Invariable Concomitance in Navya-Nyaya* 1990 が試みたが、シャシャダラの列挙した

全ての暫定定義を詳細に分析したものではなかった。本研究ではこの作業を第一の目標とする。

３．研究の方法

(1)　シャシャダラ著 NSD の「遍充章」（Vyapti-vada）の英語訳と分析を、シェーシャーナンタ（Sesananta、15 世紀頃）の注釈書『プラバー』を参照しつつ試みる。「４．研究成果」の(1)(2)に繋がる。

(2)　新ニヤーヤ学の文献に多く見られる、接辞が連続し、いわゆる抽象名詞をつくる接辞で終わる表現が、どのような意味を持っているか、という点に焦点を合わせて、シャシャダラの NSD とガンゲーシャの TC に共通する意味システムがあるかどうかを考察する。「４．研究成果」の(3)に繋がる。

(3)　遍充の議論によく使用される否定辞の意味について、新ニヤーヤ学派の創始者であるウダヤナの主張を調査する。「４．研究成果」の(4)に繋がる。

(4)　遍充の定義の「論理形式」と「表現形式」に注目して、シャシャダラとガンゲーシャを比較する。「４．研究成果」の(5)に繋がる。

(5)　定義の列挙の仕方に注目して、シャシャダラとガンゲーシャの比較を行う。「４．研究成果」の(6)に繋がる。

(6)　NSD「遍充章」と他の章との関係を見るために、NSD 全体のテキストデータベースを作成する。「４．研究成果」の(7)に繋がる。

４．研究成果

(1)　シャシャダラ著 NSD「遍充章」は、「反論部」と「答論部」とで構成され、さらに「反論部」は遍充の17の暫定定義を提示して逐次批判する部分と、続く「答論部」の導入となる部分とに分けられる。本研究期間中に、「反論部」の中の暫定定義批判の部分を英訳し分析し終え、“Sasadhara on Invariable Concomitance (vyapti) (1)”というタイトルで海外の記念論集に2009年に寄稿したが、残念ながら未だ出版されてない。「遍充章」における「答論部」導入部と「答論部」との英訳も終え、現在、英語の校閲中である。タイトルは “Sasadhara on Invariable Concomitance (vyapti) (2)” である。

新ニヤーヤ学の文献を特徴づける点として従来、①「制限者」（avacchedaka）という概念の使用、②否定辞の多用と非存在（abhava）概念の多用、③接辞の連続使用などが挙げられてきた。これらはいずれもシャシャダラの NSD 「遍充章」に見られ――この点については以下の(2)(3)において詳述するが――新ニヤーヤ学はガンゲーシャ以前に始まったという本研究者の見解を支持する。

本研究代表者は、新ニヤーヤ学文献の特徴として、「関係概念による分析」を主張してきた。この特徴は上記の①と③に関わるが、本研究の成果と何ら矛盾するものではなく、むしろこれまでの主張を補強するものである。

(2)　上記の分析作業によって以下のことが明らかとなった。シャシャダラの生きた13世紀には、14世紀のガンゲーシャのように「肯定的な」（「p が存在すれば q も存在する」という形式に基づいていて、「q が存在しなければ p も存在しない」に基づかない）遍充の定義に近いものが現れたが、定義に用いられる項目の「量化」が不十分であったり、非定義項が定義に含まれるなどの欠陥があることが判明した。しかしながら、シャシャダラの認める３つの定義は、以下の点で論理的には彼以前のものより正確なものとなっている。①ウダヤナ（11世紀）の時代には有力であった「付帯条件」（upadhi）を用いて定義をしない、②定義にトートロジーを招く「論証理由」(hetu) と「論証対象」(sadhya) という概念を用いない、③「制限者」という概念を用いる。この３点はガンゲーシャに受け継がれている。

(3)　遍充の議論において、所有を表す接辞（-mat/-vat）と性質を表す接辞（-ta/-tva）とが連続して用いられることが多い。研究者の間では、これらの接辞を伴う表現（-mat-tva/-vat-tva）と伴わない表現がしばしば自由に置換されてきたが、どうして置換が起きるのか、どのような条件で起きるのかは明らかでなかった。例えば、インドの伝統やそれを受け継いだ研究者の間では、「Aを有すること」あるいは「Aを有するものであること」（A-vat-tva）を「A」に置換することが多い。本研究はこの置換が成立する条件を明らかにしたのである（「雑誌論文①」参照）。従来、新ニヤーヤ学派の文献の大きな特徴の一つに、接辞を連続して使用することが多い、という点が上げられてきた。連続する接辞の意味をどのように理解するかという問題が、この学派の文献を理解する上で大きな障害となっていた。これが、その研究が進まない理由の一つであったが、本研究で得られた知見は、この障害を間違いなく取り除く。

(4)　2008年度にインドのウトカル大学上級講師スバーシュ・ダシュ（Subash Dash）氏を本研究補助金で２週間にわたって名古屋大学に招へいし、ウダヤナが著したとされる『否定辞論』（Nan-vada）の分析を行った。写本

が１本しか発見されていないので他の写本と比較することができないので、内容から判断しつつテキストの校訂を行ったが、16世紀のラグナータにも同じタイトルの文献があるために、これとの内容比較も急がれる。
　遍充のほとんどの定義には否定辞が現れ、この点が新ニヤーヤ学派における遍充の定義の特徴であるとも見られる点から、NSD「遍充章」の研究のみならず、この学派の創成期の研究にとって、ウダヤナの『否定辞論』は無視できないテキストである。

(5)　NSD「遍充章」に提示されたシャシャダラの確定定義が、「論理形式」を有することは先行研究で判明していたが、彼が論理形式と表現形式の違いを意識していたかどうかという問題があることに気づいた。ガンゲーシャの TC「推論部」「遍充章」「遍充五定義項」（Vyapti-pancaka）では、ガンゲーシャが論理形式と表現形式の違いを意識しているかどうかを調査した結果、意識していたことが判明した（「雑誌論文②」参照）。今後、この両形式に注目した研究は、新ニヤーヤ学の新たな特徴を浮かび上がらせる可能性がある。

(6)　NSD の注釈書『プラバー』では、17 の遍充の定義がなぜその順序で提示されているのかの説明はなかった。一方、ガンゲーシャの TC の「遍充五定義項」に対しては、なぜその順序に提示されたのかについて、何も語らない注釈書と雄弁な注釈書がある。これらの注釈書を精査し、成果を“The Genesis of Sanskrit Texts and Context in Navya-nyaya”と題する論文にまとめ、インドの出版社より出版した編著書に収めた（「図書①」参照）。定義の順序の解釈に関する注釈書間の違いについて、「引用理論」を使ってある程度説明できることが判明した。ガンーゲーシャ以前には定義の順序が問題視されなかっただけに、定義の論理形式のみならず定義間の関係に注目することによっても新ニヤーヤ学派の遍充概念の形成史を捉え直すことが可能であると考えられる。

(7)　NSD 全体のテキストデータベースの入力作業は完了したが、校正が充分にはできていない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

① Toshihiro Wada, The Logical Structure of the Third and Fifth Definitions in the Vyāptipancaka Section of Gangesa's *Tattvacintamani*, *The Journal of the Indian Academy of Philosophy*, 査読有, 48, 2010, 1-18.

② 和田壽弘、新ニヤーヤ学派における表現の簡略化―― *x-vat-tva* と *x* の同一性について――、印度哲学仏教学、査読有、23 巻、2008、344-361。

〔学会発表〕（計１件）
① 和田壽弘、新ニヤーヤ学派における表現の簡略化、日本印度学仏教学会学術大会、査読有、**愛知学院大学**、2008.9.5

〔図書〕（計１件）
①Toshihiro Wada, others, Motilal Banarsidass Publishers Pvt. Ltd., *Indian Philosophy and Text Science*, 2010, ix+206.

６．研究組織
(1)研究代表者
和田　壽弘（WADA TOSHIHIRO）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00201260

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし